

# 畫家とセリセリス

南部修太郎

青空文庫



それが癖くせのいつものふとした出来心できごころで、銀座ぎんざの散歩さんぽの道みちすがら、畫家ぐわかの夫をととはペルシア更紗さらきの壁掛かべかけを買かつて來きた。が、家うちの門もんをはひらない前まへに、彼かれはからつぽになつた財布さいふの中なかと妻つまの視線しせんをおもおもうか思おもひ浮うかべながら、その出来心できごころを少すこし後こうくわい悔かいしかけてゐた。始し終しゅう支拂じふはらひに足たらず勝がちな月つき末すえまでにもう十日かとない或ある秋あきの日ひの夕ゆふ方がただつた。

「あら、またこんな物ものを買かつてらしたの？」

さすがに隠かくしきれもせず、夫をととがてれ臭くさい顔かほ附つきでその壁掛かべかけ

の包みつつを解ほどくと、案あんの條妻でうまは非難ひなんの眼めを向むけながらさう言いつた。

「うん、近ちかい内うちに取り掛かかる裸體らたいのバツクに使つかふ積つもりなんだよ」

「まア。うまい言い譯ひわけをおつしやるのね」

と、妻つまは口くちもと元うすに薄わらい笑うかひを浮うかべた。

「いや、ほんとだよ」

「ふふふ、怪あやしいもんだわ。始しじふ終ふそんな道具だうぐだ立てばかりなすたつ

て、お仕事しごとの方はうはちつとも運はこばないぢやないの」

「そんな事ことはない。今こんど度はきつとする。展てんらんくわい覽かい會はうの方はうの約やく束そく

もあるんだから……」

「どうだか、またいつもの豫よてい定ていだけなんでせう」

妻つまは微笑びせうをつづけながら言いつたが、そこで不ふ意いに眞まがほ顔ほになると、

「だけど、あなたは、ほんとにお氣樂ね」

「何が？」

「何がつて、もう少し家うちのことや子供こどものことを考かんがへて下くだすつたつていいと思おもふわ」

「考かんがへてないと思おもつてるのか、君きみは？」

と、夫をつとも少し顔かほ色いろをあらためた。

「だつて、考かんがへていらつしやらないも同どう然ぜんだわ。今日けふはもう二は十日つかす過ぎよ。それに、こないだから、子供こどもの洋やう服ふくや靴くつをあんなに買かつてやりたいつて言いつてたぢやないの？」

「それがどうしたと言いふんだい？」

夫をつとはふてくされた氣きもち持もちで言いひ返かへした。

「まあ、空とぼけるなんて卑怯だわ。そ、そんな贅澤な壁掛なんかを氣まぐれにお買ひになる餘裕があるんならつて言ふのよ」

「だから言つてるぢやないか。仕事に使ふんだつて……」

「謙ウ、あなたのいつもの癖にきまつてるわ。ねエ、子供の洋服や靴は必要品よ。それに、月末だつてもう近いんだし、

何もそんなあつてもなくつてもいい壁掛なんかを今お買ひになることないぢやありませんか」

「分らないなア、仕事に使ふんだつて……」

「よして頂戴、そんな逃げ口上は……」

と、妻は強く夫の詞を遮りながら、眼の前の更紗模様さらさもやうに侮蔑ぶべつて的な視線しせんを投げた。

「とにかく、あなたが始終こんな氣まぐれな贅澤ばかりなさるから、月末の拂ひが足りなかつたり、子供の身のまはりをちやんとしてやれないのよ。考へても御覽なさい、夏繪は來年もう學校よ。暫くはまだいいけれど、さうなつてから今のやうなのはあたしまつびらだわ。第一、こんな暮し方をしてゐて、さきさきどうなるかと思ふと不安ぢやなくつて？」

言いながら、妻はまともに夫の顔を見た。

をつとおも

夫は思はず眼をそらした。すつかり弱味を突かれた感じの内

心まるつた。が、そこで妻の非難をすなほに受けとるためには

をつときしつ

夫の氣質はあまりに我儘で、負け惜みが強かつた。それに自分

でも可成り後悔しかけてゐる矢先だつたのが、反撥的に、

かな

後悔

しかけてゐる

矢先

だつたのが、

反撥的に、

をつときもち  
夫の氣持をあまのじやくにした。

「ふん、それでまた貯金ちよきんでもしたいつていふ例れいの口癖くちぐせだらう？」

「だつて、さうでもしなかつたら……」

「よせ、よせ。僕はそんな貯金ちよきんなんて、けち臭くさい、打算ださん的なやり方かたは大嫌だいきらひだ。なアに、その時ときはまたその時ときでどうにかなる。いや、きつと、どうにかするよ」

「だけど、あなたのそのどうにかするつていふことほど、いつも當あてにならないのはないぢやありませんか」

「然しかし、お互たがひに日干ひぼしにもならない所ところを見ると、たしかにどうにかなつて行きゆつつあるぢやないか」

「あア、あなたにはとても叶はない」

妻はふつと笑ひ出した。

「何しろ何だ、そんな世帯染みた事を言ふなアよしてくれ。聞  
ただけでもくさくさするよ」

と、夫は調子に乗りながら、

「貧乏畫家の妻として三年間で三百圓溜めたあたしの経験

か？」

「厭や、厭や、そんなに茶化しておしまひになるの……」

妻はちよつと夫を睨むやうにしながら、

「ほんとにあたし眞劍に言つてるのよ。お願いですから、子供

にだけは、子供にだけはみじめな思ひをさせないやうにね」

「分つた、分つた」

不意にうるんだ妻の瞳を刹那に意識しながら、夫はわざと投げつけるやうに言つた。何か重いものが胸に來た。そして、夫は壁掛を手に取ると、急ぎ足にアトリエの方へ立つて行つた。

## 2

二三日経つた或る晴れた日の午後だつた。朝の半日をアトリエに籠つた夫は庭で二人の子供と快活な笑聲を立ててゐた。長女の夏繪と四つになる長男の敏樹と、子供好きの夫は氣持よく仕事が運んだあとでひどく上機嫌だつた。

「さあ、夏繪なつゑ。今度はうまく受け取るんだぞ。そら、ワン、ツウ、スリイ……」

と、夫をととは四五間けんか向うに立つてゐる子供こどもの方ほうへ色いろどりしたゴム鞣まりを投げた。が、夏繪なつゑは息いき込んでゐたのがまたも受け取りそこねて、  
 鞣まりは色しき彩さいを躍をどらしながらうしろの樹蔭こかげへころがつて行いつた。

「駄目だめよ、パパア。そんなにひどくはふつちやア……」

と、夏繪なつゑは紺こんのスカートをひるがへ翻ひるがへしながら鞣まりを追おつた。

「そら、今度は敏樹としきはふつて御覽ごらん……」

「うん……」

と受け答こたへて、茶色ちやいろのスエエタアを着きた、まるまる肥ふとつた體からだをよちよちさせながら、敏樹としきは別べつのちひ小さな鞣まりを投げた。が、見けんた

當はづれて、それは夫の横へそれてしまった。

「やア、い、パパだつて下手だわ」

途端に、夏繪は手を叩きながら、復讐的に野次り立てた。

わざと大袈裟に頭をかきながら、夫は鞠を追つた。そして、庭

の一隅の呉竹の根元にころがつてゐるそれを拾ひ上げようとし

た刹那、一匹の蜂の翅音にはつと手をすくめた。見返ると、黒に

黄色の縞のある大柄の蜂で、一度高く飛び上つたのがまた竹の

根元に降りて來た。と、地面から一尺ほどの高さの竹の皮の間に

蜘蛛の死骸が挟んである。蜂はそれにとまつて暫く夫の氣配を窺

つてゐるらしかつたが、それが身動きもしないのを見ると、死骸

を離れてすぐ近くの地面に飛び降りた。そして、暫くあたりを歩

きまはつてゐたが、ちよつとした土の凹みにぶつかり、  
へあし 脚で穴を掘り出した。  
くちばしま 嘴と前

(セリセリスだな。)

いつか讀んだアンリ、ファブルの「昆蟲記」を思ひ浮べなが  
をつと、夫は好奇の瞳を凝らした。そして、ばたばた近寄つて來た夏  
つゑと、繪と敏樹を靜にさせながら、二人を兩方から抱きよせたまま  
はち 蜂の動作を眺めつゞけてゐた。

蜂は絶えず三人の存在を警戒しながらも、一心に、敏  
はたら 活に働いた。頭が土に突進する。脚が盛に土をはねのける。  
しづか それは靜に差した明るい秋の日差の中に涙の熱くなるやうな努  
く 力に見えた。そして、一厘二厘と、穴は小さな蜂の體を隠すほ

どにだんだん深く掘られて行つた。

「パパ。あの蜂何してるの」

と、息を凝らしてゐた夏繪が低く尋ねかけた。

「うん、今あの穴の中へ子供を生みつけるんだよ。」

と、夫は何か胸を打つものを感じながら小聲に答へた。

全くわき眼も振らないやうな蜂の動作は變に嚴肅にさへ見

えた。そして、瞬きもせずに見詰めてゐる内に、夫はその一心さ

に何か嫉妬に似たやうなものを感じた。すぐ夫は傍から松葉を拾

ひ上げて穴の中をつつ突いた。と、蜂はあわてて穴から出て來た

が、忽ち松葉に向つて威嚇的な素振を見せた。

「あら、蜂が怒つてよ」

と、夏繪なつゑは恐おそれるやうに嘯ささやいて夫をつとの手をを抑おさへた。

が、惡いたづら戯きぶん氣分きぶんになつて、夫をつとは手をを引ひかなかつた。そして、なほも蜂はちの體からだにつつ突つきかかると、すぐ嘴くちばしが松葉まつばに噛かみついた。不ふ思議しぎにあたりが靜しづかだつた。が、やがて不ふ意いに松葉まつばから離はなれると蜂はちはぶんと飛とび上あつた。三人にんははつとどよめいた。けれども、蜂はちは大事だいじな犠ぎ牲せいの蜘蛛くもの死骸しがいを警けい戒かいしに行いつたのだつた。で、その存そんざい在ざいをたしかめると、安あん心しんしたやうにまたすぐ穴あなの所ところへ飛とび降おりて來きた。

「パパ、また穴あなを掘ほるよ」

と、しやがんで膝ひざにぢつと兩手りやうてをついたまま、敏樹としきが何なにか恐おそれるやうな聲こゑで嘯ささやいた。

穴あなはもう殆ど蜂はちの體からだのすべてを隠かくすやうな深ふかさになつてゐた。

が、蜂はちはまだその劇はげしい勞働らうどうを休やすめなかつた。そして、その間あひだにも絶たえず三人にんの様子やうすを警戒けいかいし、なほも二三度どくも蜘蛛くもの死骸しがいの存ぞん在ざいをたしかめに行いつた。

(本能ほんのう、これがただ本能ほんのうだけで出來できることか知らしら?)

その眞劍しんけんさに打うたれて、夫をととはそんな事ことを考かんがへつづけながら、ぢつと瞳ひとみを凝こらしてゐた。

體からだが穴あなの中なかにすつかり見みえなくなるほどの深ふかさになると、蜂はちはやがてほつとしたやうにそとへ出でて來きた。そして、なほも警戒けいかいするやうに念ねんを入れるやうに穴あなのまはりを歩あるきまはつてゐたが、やがてひよいと飛とび上あがると、蜘蛛くもの死骸しがいをくはへて再び穴あなの所ところへ

舞まひもどつて來きた。

「まア、あの蜘蛛くもどうしたの？ 死しんぢやつてるのね？」

「うん、蜂はちに殺ころされたんだよ。そして、あれが蜂はちの子供こどもの御飯ごはんになるんだよ」

「御飯ごはんに？」

「うん、だから見てて御覽ごらん。今いまにあの穴あなの中なかへちやんとおしまひするから……」

「蜘蛛くもなんておいしくないね、パパ……」

敏樹としきが上うはずつた聲こゑを挾はさんだ。

「でも、蜂はちの子供こどもには御馳走ごちさうなんだよ」

穴あなの二三寸ずんてまへ手前おに降はちりた蜂はちは、やがて頭あたまと前脚まへあしで蜘蛛くもの死骸しがい

を穴の深みへ押し行つた。そして、それを押し入れきつてしまふと、蜂は今度は逆にあとずさりしながら、自分の尻の方を穴の中へ差し込んだ。と同時に、穴のそとに出た頭と前半身が不思議な顫動を起しはじめた。

「まあ、をかしい、何してるの？」

と、夏繪が頓狂な聲を立てた。

「しつ、穴の中へ卵を生みつけてゐるんだよ。そしてね、來年の春になつて卵がかへると蜘蛛が蜂の子供の御飯になるのさ」

と、話し聞かせてゐる内に、夫の頭の中には二三日前の妻との對話が不意に思ひ浮んで來た。夫は我知らず苦笑した。蜂の眞劍さが、その子供に對する用意周到さが何か皮肉に胸に呼び

かけてゐるやうな氣持きもちだつた。

不思議ふしぎな顫動せんどうが何か必死ひつしてき的な感かんじで二三ふんかん分間つづく、

蜂はちはやがて穴あなのそとへ出でて來きた。そして、ちよつと息いきを入いれたや

うな様子やうすをすると、今度こんどはまた頭あたまと前脚まへあしを盛さかんに動うごかしながら掘ほ

り返かへした土つちで穴あなを埋うめ出だした。而しかも、幼蟲えうちうが出易でやすくするため

あらう、蜂はちは明あきらかにこまかい土つちの選せん擇たくに氣きを附つけてゐるらしかつ

た。さうして穴あながすつかり埋うめられてしまふと、蜂はちは暫しばらく穴あなのま

はりあるを歩あるきまはつてゐたが、やがてふうんと翅音はおとを立てながら、

黒黄斑くろきまだらの弧線こせんを清せい澄ちような秋あきの空間くうかんに描えがきつつどこともなく

飛とび去さつて行いつた。

「はつはつは、パパは馬鹿ばかだな、ほんとにパパは馬鹿ばかだな」

と、立ち上りぎま、夫は高い笑聲とともに不意に無意識に  
 そんな事を呟いた。そして、兩方の手で夏繪と敏樹を自分の  
 體の方へ引き締めるやうにしながら、庭の樹の間をアトリエの方  
 へ歩き出した。

# 青空文庫情報

底本：「新進傑作小説全集」↳ 南部修太郎集・石濱金作集」平凡社

1930（昭和5）年2月10日発行

入力：小林徹

校正：伊藤時也

2000年8月7日公開

2006年1月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 畫家とセリセリス

南部修太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>